

第3回 気高地域学校統合準備委員会

令和3年6月8日（火） 19:00～

気高町総合支所

1 開 会

2 委員長あいさつ

3 報告事項

- (1) 第2回議事概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料1
- (2) 広報紙の発行について・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料2

4 議 事

- (1) 講演会
 - ・小中一貫教育について（仮題）
 - 講師 木下 公明 氏
- (2) 学校種等について・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料3

5 その他

6 閉 会

気高地域学校統合準備委員会委員名簿

	所 属	氏 名	備考
1	宝木地区まちづくり協議会会長	米田 克彦	
2	酒津地区まちづくり協議会会長	河根 裕二	
3	宝木小学校校長	田中 幸子	
4	宝木小学校 PTA 会長	上田 卓	
5	瑞穂地区まちづくり協議会会長	塩田 則夫	
6	瑞穂小学校校長	山根 啓嗣	
7	瑞穂小学校 PTA 代表	三谷 知生	
8	浜村地区まちづくり協議会会長	湯口 史章	
9	浜村小学校校長	長谷川 理恵	
10	浜村小学校教育振興会会長	横山 圭輔	
11	逢坂の教育を考える会会長	久野 壯	
12	逢坂小学校校長	岡本 千鶴	
13	逢坂小学校 PTA 会長	久野 慶太	
14	気高中学校校長	池原 巳途志	
15	気高中学校 PTA 会長	井上 康範	
16	浜村保育園園長	森村 郁子	
17	浜村保育園保護者会長	小林 奨	
18	ひかり保育園園長	伊藤 正子	
19	ひかり保育園保護者代表	江谷 清隆	

第2回 気高地域学校統合準備委員会概要について

1 日 時 令和3年5月10日(月) 19時 ～ 20時32分

2 会 場 気高町総合支所

3 出席者 【委員】17名
【気高町総合支所】職員2名
【教育委員会事務局(教育総務課校区審議室)】職員3名

4 議 事

(1) 地域住民及び保護者への情報提供について

《決定・確認内容》

・広報紙の名称は、「地域とともに学校を創る～気高地域学校統合準備委員会だより～」に決定。広報誌の発行手順や鳥取市公式ホームページでの公開について確認を行った。

(2) 学校種・学校用地の選定について

《質疑・意見》

- ・義務教育学校、小中一貫校など、始めは何のことだか分からなかったが、聞けば聞くほど学校種の議論も大切だと思うようになった。
- ・小中一貫校にした場合の具体的な教育的成果はあがっているのか。数字などはあるか。
- ・小中一貫にしても義務教育学校にしても、人間関係の固定化が気になっている。たしかに中1ギャップはなくなると思うが、9年間同じメンバーで過ごした後に高校に入学することになると大きく環境が変わることになるのでその時のことを心配している。
- ・小中一貫教育の強みや課題の説明があったが、小学校統合による強み課題もご説明いただいた上で、それらを比べながら判断をしていくほうが良いと思う。
- ・いきなり5校が一緒になるのは変化が大きいと思うので、親や教員の負担になると思う。段階的な方がよいのではないかと思う。
- ・青谷の小学校統合の時、まずは小学校の仲間づくりをしっかりと行ったと聞いている。気高もまず4小学校を統合して気高の小学校を作るのがよいのではないか。ただし、20年後を見据え小中一貫校や義務教育学校も視野にいれながら場所を考えておくことも必要だと思う。
- ・鹿野地域では、まず小学校を統合してから、その後義務教育学校になっている。まず、新しい小学校でどういう教育をしてどういった子どもたちを育てたいかをまずしてからでないと、中学校が一緒になるということはもうワンステップ上ではないかと感じている。
- ・地域には小中一貫型の学校や義務教育学校の情報を提供した上で、委員会ではこう決定しこう進めていきたいと思っているという発信の仕方が肝心だと思う。
- ・中学校も一緒になると大規模すぎると思う。段階を経て、慎重に進めてはどうかと思う。
- ・まずは小学校の中で切磋琢磨されて育つ方がよいと思う。小学校のみの統合でいった方がよいと思う。

(3) 通学方法について

《質疑・意見》

- ・バス通学には距離が何km以上からなるのか。
- ・学校の位置によってはスクールバスを導入することも考えられるのか。
- ・バス路線や運行ダイヤを変えることもしていただけるのか。
- ・徒歩や自転車で通わなくなってしまうと、地域で子どもの声が聞こえなくなり寂しくなると思う。なるべく大多数が徒歩で歩けるところがいいと思う。
- ・スクールバス等という表現がしてあるが、「等」にはJRも含まれているのか。また小学生の自転車通学の可能性はあるのか。

5 その他

《次回予定》

日にち：6月8日（火）で開催

時 間：19時から 場 所：気高町総合支所 2階会議室

地域とともに学校を創る



～気高地域学校統合準備委員会だより～

第2回気高地域学校統合準備委員会を開催しました

広報誌の発行について

ゴールデンウィーク明けの5月10日、17名の委員さんの参加のもと、第2回気高地域学校統合準備委員会が開催されました。まずは、この広報誌の名称を挙手により決定し、地域の皆さんに議論の様子を毎回お伝えしていくことにします。その名称は「地域とともに学校を創る」としました。

昨今、人間関係の希薄化や少子化、家庭教育の充実が課題となっている中で、学校や子どもたちが抱える課題は複雑化しており、みんなで取り組んでいく動きが求められています。さらに、学校を核とした協働の取組をとおして子どもたちの人格形成はもとより、地域や世界の未来を担う人材を育てる学校づくりが求められています。



気高の子どもを気高の住民みんなで育てるといった思いを込めてこの広報誌の名称を決定しました。

参考：鹿野学園のブロックの区分

いよいよ議論が始まります

統合後の学校の設置場所について考えるためには、まず、どんな形態の学校(学校種)をつくるのかを議論する必要があります。鳥取市校区審議会の答申では「4校を新設統合する」「小中一貫型の学校についても選択肢として考える」という文言があり



ます。そこで、今回は、小中一貫型の学校とはどのようなものか、事務局より説明がありました。一部を紹介します。上の図は平成30年4月に開校した鹿野学園の仕組みを表したものです。鹿野学園は小中一貫型の学校のなかでも、小中が完全に1つの学校となり9年制の仕組みをとる「義務教育学校」という形態です。義務教育9年間を見通した教育ができることや小学校高学年から教科担任制をとり、専門的な学びができるなどの利点があります。

気高地域でこの学校種を選択すれば、中学校の生徒数減少の課題が一部解消されるほか、地域の特色を生かした独自教科が設定できるなどのメリット(利点)

があります。ただし、学校用地が限定される可能性もあるため、慎重な議論が必要です。

議論の内容を紹介します

～第2回気高地域学校統合準備委員会の議論より～

◆学校種（学校の形態）について

小中一貫校にした場合の具体的な教育的成果はあがっているのか。具体的な話が聞いてみたいです。



小中一貫にしても義務教育学校にしても、9年間同じメンバーで過ごすことは気になりますね。ただ、たしかに小学校卒業、中学入学という段差がなくなるのはいいですね。

◆学校の場所について

学校の位置によってはスクールバスを導入することも考えてほしいですね。



でも、徒歩や自転車で通わなくなってしまうと、地域で子どもの声が聞こえなくなり寂しくなりますね。なるべく大多数が徒歩で歩けるところがいいんじゃないでしょうか。

ともだちたくさん、楽しいね

～気高中学校区4小学校連携交流事業～

気高町内4つの小学校の統合は決まり、新しい学校はどんな学校になるのか期待に胸が膨らみますが、子どもや保護者に不安が全くないわけではありません。子どもたちが新しい環境に適應できるのか、統合までの期間、小規模化している学校に対する手立てが必要ではないかといったことです。そこで、以前より各地域の検討組織からは市教育委員会に対して交流に必要な予算措置を要望していました。

今回第1回目として、6月3日に逢坂小学校の児童9名が瑞穂小学校へ出かけ、田植えと芋の苗植えを行いました。子どもたちは、瑞穂地区のふれあい農園の会の皆さんの指導のもと、泥だらけになりながらも力を合わせて取り組んでいました。



交流の様子は各校のホームページでもご覧いただけます。子どもたちが安心して学校へ通えるようこれからも見守っていききたいと思います。



◀YouTube
チャンネルは
こちらから

発行：気高地域学校統合準備委員会
事務局：鳥取市教育委員会事務局校区審議室
TEL : (0857) 30 - 8405
E-mail : kokushingi@city.tottori.lg.jp

小中一貫教育が取り組まれている背景

① 義務教育の目的・目標の創設

- 小学校・中学校の教職員が義務教育9年間の全体像を把握する。
系統性・連続性に配慮した教育を行う。

② 教育内容や学習活動の量的・質的充実

- 授業時間数の増加
- 小学校の外国語・外国語活動、理数教育 等
- 教科担任制への移行

③ 発達の早期化に関わる対応

- 小学校高学年段階における発達の早期化

④ いわゆる「中1ギャップ」への対応

- 小学校から中学校への段差の大きさに配慮して円滑な接続を行う

⑤ 社会性育成機能の強化の必要性

- 家庭・地域の社会性育成機能の低下

小中一貫教育の成果（文部科学省 小中一貫教育等についての実態調査）

項目	大きな成果が認められる	成果が認められる
中学校への進学に不安を覚える児童が減少した	27%	63%
いわゆる「中1ギャップ」が緩和された	22%	67%
小・中の教職員の間で互いのよさを取り入れる意識が高まった	20%	69%
小・中の教職員で協力して指導にあたる意識が高まった	21%	64%
上級生が下級生の手本となろうとする意識が高まった	17%	58%

本市義務教育学校における聞き取り結果（9年制の効果）

生活面

- ・ 高等ブロックの生徒は中等以下の児童の模範となろうとする意識が上昇
- ・ 校内に8年生、9年生が生活していることで手本や憧れの存在

学力面

- ・ 6年生は3月いっぱいまで学習が可能
- ・ 高学年は教科担任制がとりやすく、教科間の学力の差が埋まる
- ・ 小学校の教員も高校入試を意識、中学校の教員はつまづきを早めに察知
- ・ 学習が前倒しでき、8年生から進路指導を開始することも可能

児童、生徒の意識

- ・ 縦割り活動の充実
- ・ 多くの行事、様々な大人との出会い

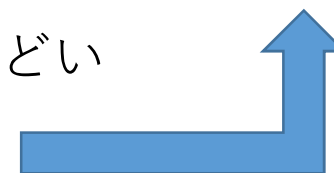
保護者の意識

- ・ 教科担任制、部活動の充実に期待
- ・ 登下校時の安心
- ・ 中学校教員との壁が低下

教職員の意識

- ・ 中学校教員からすると小学生を担当することへのとまどい
- ・ 小中の打ち合わせの増加への不安
- ・ 小学校教員からすると部活を担当することへの不安

開校までの事務的負担や不安はあるが、勤務してみると9年間で子どもを伸ばすことよさを痛感
お互いの大変さ楽しさを理解



西2ブロックの生徒数の見通し

本市における少子化、学校小規模化への対応
学校規模の適正化や適正配置、都市計画の観点。

	令和2	令和14	令和22
気高中	184	153	101~145
青谷中	105	68	57~83
鹿野学園 (後期)	76	63	42~60

令和14年度生徒数は住民基本台帳より推計

令和22年度生徒数は減少率21%~45%として推計

学校種選定に関わる西2ブロックの状況

小学校4校のみの統合とした場合

- ☆将来的に他エリアと中学校を統合すれば・・・
- 小学校、中学校と出会う友達の広がりがある
- 適正規模が確保できる
- ▲将来的の他のエリアを含めてもう一度校区再編の可能性
- ▲かなり遠方の中学校への登校
- ☆他のエリアとの合意形成がなされなかった場合、
中学校が小規模化、義務教育学校を再び検討する必要性

小中一貫型の学校とした場合

- 小中一貫教育の効果が出やすい（前出①～⑥）
- 中学校の小規模化の課題が一部解消
- 将来学校種について再検討する必要性がない
- 各地区の学校に小学生、中学生が通学
- ▲人間関係の固定化、同学年の人数が増えるわけではない
- ▲他のエリアの学校種も事実上決定してしまう

場所選定に関わって想定される状況

既存施設を活用

新築より短期間で整備できる

- ・校舎の改修や増築が必要
- ・改修中は校庭の一部にプレハブ校舎を設置

中学校周辺に建築

小中一貫教育を想定した現代型の校舎建築ができる

- ・必要に応じてお互いの施設を活用
(例 小体育館 中体育館 小校庭 中校庭 プールは共用等)
- ・用地造成が必要な可能性

新規用地の取得

利便性や安全性を考慮した場所選定ができる可能性がある

- ・用地取得計画や施設整備計画が現時点では見通しにくい
- ・将来的な学校種の選択に制限が出る可能性がある

【全て現時点での見通しや可能性を示すものである】⁶